

冠詞の意味論 — 定性の分析

吉田 光演

1 名詞表現の中心としての冠詞

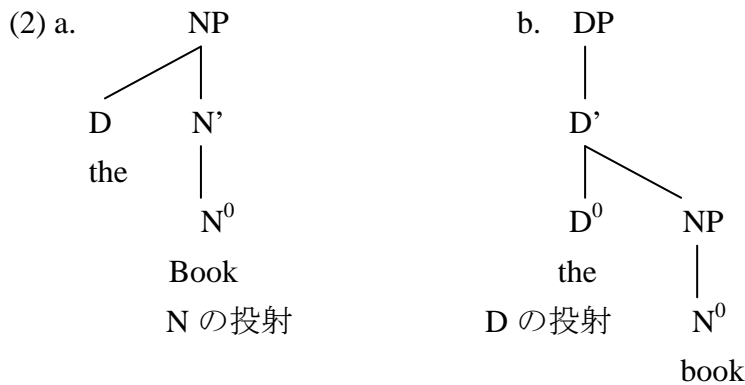
この章では、英語やドイツ語、その他の言語における冠詞の役割について、比較言語的、意味論的な観点から分析することを目的とする。

マーク・ピーターセンの『日本人の英語』(1988)の冒頭において、日本人学生が書いた英語の奇妙な作文の実例として次の文章が紹介されている。

(1) Last night, I ate a chicken in the backyard.

この文の意図は、「裏庭のパーティーでチキンを食べた」というようなものであって、これを英語で表現するためには、"I ate chicken in the backyard."と書くべきであった。しかし、ピーターセンによれば、ただ一箇所だけ冠詞"a"を付け加えたために、「庭で鶏を一匹捕まえてそのまま丸ごと食べた」という凄まじい場面を想起させる内容になってしまったという。日本人は英作文を書く時に、名詞に単なるお飾りのように無意識的に冠詞のaを付けようとする傾向があるが、実際の英語母語話者の感覚としては、「冠詞のaがまずあって、そこに後から名詞を付け加える」感覚の方が正しいという(ピーターセン(1988))。読者はこのピーターセン氏の主張を読んで驚くと同時に、「ああ、なるほど、そうだったのか」と感心することであろう。学校教育における英文法では、名詞がまず基本としてあって、それに不定冠詞を添えるか定冠詞を添えるかという二次的な問題が起きるといふ風に教えられることが多かった。しかし、実際は、数えられる形をなす個物に対して、aを対応づける冠詞の方が名詞よりも本質的なものだったというわけである。このことは、冠詞体系をもたない日本語の母語話者にとっては、想像しにくい認識であると同時に、冠詞体系をもつ英語の学習においては重要なヒントをもたらす知見であるといえる。

この見方には、理論的な意味での追い風も出てきている。最近の生成文法理論では、従来「名詞句(NP; noun phrase)」と呼ばれてきた名詞的な範疇を、冠詞(限定詞 determiner)を中心とする「限定詞句(DP=determiner phrase)」として再定義している。例えば、Abney (1987)は、名詞句 NP の上位に機能範疇 D を新たに設け、主要部の D が NP を補部に取り構造を提案した。名詞範疇の主要部は、次の(2)a のような名詞"book"ではなく、(2)b の定冠詞"the"であり、この"the"が限定詞 D として句全体を完結させる機能を担うとするのである。



限定詞 **D** の働きには様々な解釈が可能である。統語的には、反復可能な形容詞などと違って、限定作用によって名詞的な範疇の投射を完全に閉じる機能がある (cf. Fukui 1986)。また、限定詞 **D** の意味的な働きとしては、個体集合としての名詞の外延に対して、指示的な値を与える (例えば個体の外延を決定する) 指示に関連する意味機能をもっていると考えられる。

(2b)の構造が正しいと思われる根拠は色々あるが、例えば次のようなものがある。主語の人称・数を担っている機能範疇の屈折辞 **AGR**(=agreement) は、時制文においては主語に主格を付与するが、名詞句内においては **AGR** は属格を付与する (または照合の関係が成立する)。

(3) [IP He [I⁰ AGR+Tense][VP[V^r destroyed the city]]]
 主格 ↑ _____

(4) [DP his [D⁰ AGR][NP[N^r destruction of the city]]]
 属格 ↑ _____

(cf. [NP [D his] [N⁰ destruction] of the city])

(4)を限定詞句 **DP** と分析すると、文と限定詞句の平行性 (機能範疇 **AGR** による格付与) が得られる。一方、これを **NP** と分析すると、屈折辞 **AGR** が生じる位置が保障されず、文と名詞句との間の平行関係がよく見えなくなってしまう。

次に、代名詞の場合を見よう。代名詞が名詞範疇 **N** に属すると考えると、代名詞が他の語によって修飾できないという (5b) のような事実が説明できない。指定部 **D** は空であり、そこに冠詞が挿入されても、少なくとも統語的には問題ないと考えられるからである。しかし、**DP** 分析に基づいて、(5b) のように代名詞が限定詞範疇 **D** に属すると仮定すると、この問題も解決する。代名詞は意味的には指示値が決定されているから、名詞 **N** 範疇ではなく、むしろ **D** 範疇に属する。一つの句 (投射) において、主要部は一つしか許されないの、同じ **D** 範疇に属する冠詞と代名詞が共起する (5c) のような構造は **X** バー構造上ありえない。よって、"the he" といった不適格な連鎖を正しく排除できる。また、**DP**

分析に基づけば, (5d)の”we linguists”のような代名詞+名詞句の組み合わせも代名詞 D が名詞句を補部として取る DP としての的確に分析できる。

- (5) a. *[_{NP} the [_N he]] b. [_{DP} [_D he]]
 c. *[_{DP} [_D the he]] d. [_{DP} [_{D'} [_D we] [_{NP} linguists]]]

また, ドイツ語のように, 冠詞が強勢アクセントを伴って指示代名詞としての意味をもつ場合, 名詞句なしでも項として機能することも, DP 仮説の下で適切に説明できる。

- (6) a. [_{DP} [_D der] Student] (= the student; 男性・単数・主格)
 b. [_{DP} [_D der] Ø]
 c. [_{NP} [_D der] [_N Ø]]

(6a)は, 「例のあの男性の学生が」という定名詞句を表すが, これを(6b)では名詞句を削除して, 主要部 D だけを残す形となっている。ここで, D に相当する定冠詞”der”には, 性の情報(男性), 数情報(単数), 格(主格)が含まれていることに注意されたい(つまり, Student を削除してもこれらの情報は保持されている)。一方, NP 分析では, 主要部が削除され, 指定部だけが残っている不自然な形となる。

要するに, 冠詞が付随する名詞句を DP として分析することは, 統語論的には正しい方向であるということが結論できる。ただし, 冠詞が現れない裸名詞句(bare NP)——例えば, students, gold のような複数名詞, 質量名詞をどのように分析するのかは, また別個の問題である(NP とするか, それとも空の限定詞 D をもつ DP とするか)。これについては後述する。

2 冠詞言語の多様性

「英語の名詞表現は冠詞から考えよ」。しかし, この認識論的な転回は, それだけではまだ言語学的には不十分である。問題は2つある。冠詞がある言語と, 冠詞がない日本語のような言語との間には, いかなる相違があるのか? 両者に共通性はないのだろうか? こうした言語類型的な洞察, 意味論的な掘り下げを抜きにした言語記述だけでは, 冠詞の本質は理解できない。

もう一つの問題は英語自体にある。名詞の中心をなす冠詞の効力は英語では万能ではない。可算名詞である個体としての動物(chicken⇒ニワトリ)が, 食肉(chicken⇒チキン)と化すと不可算=物質名詞に転ずる, 従って無冠詞になるのはまだ分かりやすい。どちらが元であるにせよ, それは対象の認知の仕方に基づいている。しかし, 個別的な形(境界)をもつ魚や家具が物質名詞(集合名詞)

扱いなのはなぜなのかはそれほど明確ではない(*a fish, *a furniture)? ちなみに、同じゲルマン系言語のドイツ語では、魚は可算名詞(ein Fisch)で、家具は複数名詞(die Möbel)である。アプリアリに「家具は可算言語では不可算扱いになる」と断定することはできない。可算・不可算の相違は、対象の性質から認知的に決まることもあるが、個別言語的な差異も考慮しなくてはならないのである。

定冠詞の用法も微妙に異なる。次の文の主語の複数名詞を総称的に「犬という種」と解釈すると、英語では定冠詞付きは不適切になるが、ドイツ語は定冠詞付きでも(die Hunde = the dogs) なしでも(Hunde= dogs)構わず、イタリア語では定冠詞をつけなくてはならない(i cani= the dogs)。

- (7)a. (*The) Dogs love to play.(犬は遊ぶのが好きだ)
- b. (Die) Hunde spielen gern. ((7)a のドイツ語対応)
- c. *(I) cani amano giocare. ((7)a のイタリア語対応)

多くの冠詞言語の中から英語だけを取り出して冠詞のモデル・プロトタイプとするのは危険である。そこで本稿では、統語論における限定詞句分析と一般量子意味論に基づいて冠詞の意味を考える。特に、冠詞が名詞句を項にとって限定を行う関数(演算子)であると把握し、その上で英語、ドイツ語、ロマンス語における冠詞範疇の機能と射程範囲をとらえ返す。

3 限定詞句と一般量子解釈

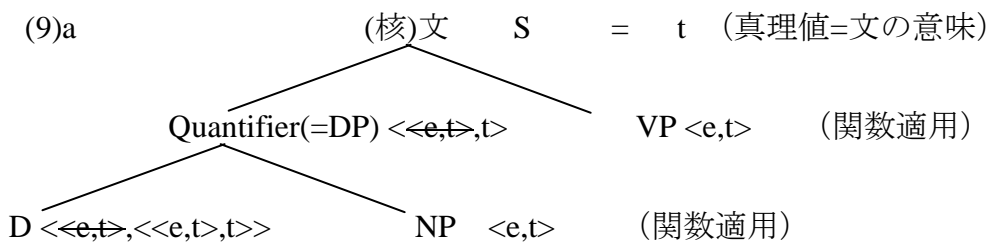
先に限定詞句分析を見たが、冠詞が必須の言語も、冠詞がない言語もあるので、名詞的投射がある場合には DP, 別の場合は NP とバラバラでは都合が悪い。しかし、冠詞だけでなく、名詞限定の機能まで限定詞 D の範囲を広げてみると、どの言語にも名詞にかかる every, some のような量子表現があることが分かる。

- (8) a. [_{DP} every [_{NP} child]] is cute.
- b. [_{DP} どの [_{NP} 子供]も] 可愛い。
- c. $\forall x$ [child'(x) \rightarrow cute'(x)]

(8)a, b の意味は普遍量子 \forall を用いた(8)c で表わされる(「子供」の集合 {a,b,c...} の要素を列挙し、各個体が「可愛い」集合に含まれれば真)。NP は量子が束縛する変項 x の値の範囲を定める述語タイプ $\langle e, t \rangle$ である。ここで e は個体(entity)を指示する意味タイプ、t は真理値(truth)を指示するタイプで、 $\langle e, t \rangle$ は個体 e から t への関数を示し、個体の集合と等しい。

量子表現 every, 「どの・・・も」は限定詞範疇の語であり、意味的には NP の値を項にとる関数、即ち一般量子(generalized quantifier)として解釈できる。一

階の述語論理では、John のような固有名詞は個体 e を指示するタイプであり、動詞句は個体 e を項に取る関数 $\langle e, t \rangle$ である。しかし、これでは every, all, some を含む限定詞句の意味自体は捉えられない。そこで、主語—述語（項—関数）の関係を逆転させ、むしろ主語を（動詞句を項に取る）関数と解釈するものがモンタギューに端を発する「一般量子子」(generalized quantifier)の理論である。つまり、限定詞句を、動詞句が表す属性 $\langle e, t \rangle$ を項に取って真理値を返す関数へと抽象化させる、即ち個体の集合の集合 $\langle \langle e, t \rangle, t \rangle$ と解釈する ((9d)は動詞句意味 P から真理値への関数を示す)。



(9b) every(NP) : $\lambda Q \lambda P \forall x [Q_{NP}(x) \rightarrow P(x)]$ (λ =ラムダ演算子)

(9c) every(student) : $\lambda Q \lambda P \forall x [Q_{NP'}(x) \rightarrow P(x)](\text{student})$

d. $\Rightarrow \lambda P \forall x [\text{student}(x) \rightarrow P(x)]$ (ラムダ変換)

e every student walked.: $\lambda P \forall x [\text{student}(x) \rightarrow P(x)](\text{walked})$

f. $\Rightarrow \forall x [\text{student}(x) \rightarrow \text{walked}(x)]$

(9b) の論理表示で、NP'の部分は集合（述語）タイプである必要がある。John や「太郎」といった固有名詞は個体タイプ e であって個体集合 $\langle e, t \rangle$ ではないので、every John とか「どの太郎も」といった表現は関数適用できず、除外される。(9c)のように、every student の場合には、関数 every に最初の項 student が適用され、(9d)のような意味が得られる（述語 P の集合）。さらに、(9e)のように walked のような述語（動詞句）が代入されて、最終的に t に相当する真理値表現が得られる(=9f)。

この議論から結論できるのは、冠詞がない日本語でも少なくとも(8)のような量化表現の関数解釈は可能であり、統語論的にも限定詞句 DP が投射すると考えることは問題ない、というよりその必要があるということである。このように名詞句を意味的に一般量子子として解釈し、その統語的反映が限定詞句であるとすると、「全ての言語は原理的に限定詞句を投射する」という言語を超えた一般化が得られる（限定詞Dを統語構造の中に仮定せずに、意味論的には同じ解釈を得る方法もある。しかし、ここではそれについては一応度外視する）。

次に冠詞の意味を考える。不定冠詞 a は、存在量化 \exists に対応する演算子であ

る。(10a)では $NP'(x)$ を満たす個体 x が最低一つ存在すればよいが、 x は個別化できる原子的対象でなくてはならない。物質名詞 **water** は、下限を定める原子単位が曖昧なので $water'(x)$ は定義されず、**a** が使えない。定冠詞 **the** は(10b)のように、 ι (イオタ演算子)、即ち $NP'(x)$ を文脈内で満たす特定の個体 x を一義的に選択する関数と分析する(唯一性の前提)。

$$(10) a. \quad [_{DP} a NP] \rightarrow \quad \lambda P \exists x [NP'(x) \& P(x)]$$

$$(10) b. \quad [_{DP} the NP] \rightarrow \quad \lambda P [P(\iota x [NP'(x)])]$$

これらは、冠詞の形式意味論的な解釈の一つであり、冠詞の機能を記述するためには、語用論的な要因も当然考慮しなければならない。Heim, Kamp 流の談話表示理論(DRT)の見方を借りれば、**a NP** は話者・聞き手が作り上げる談話状況内に $NP(x)$ である不特定の要素 x を新たに導入する働きを担う。一方、談話状況に既に導入された対象 x を聞き手が特定し、指示できるようになれば、 x は旧情報として **the** などの定冠詞でマークされることになる。

4 冠詞出現条件としての名辞写像パラメータ

冠詞と名詞の関係は、①限定詞が **NP** を量化・限定し、②それによって、限定詞が世界の対象と結びつける指示的な力を名詞句全体に与える、③**NP** は変項になる個体の集合を提供する一となるであろう。

しかし、この機能分担には、冠詞を多用するロマンス語、無冠詞も出現する英語、定冠詞だけで不定冠詞がないアイスランド語など、個別言語によって様々の幅が見られる。また、一言語における冠詞出現の条件も均質ではない。英語では、①固有名詞、②物質名詞、③裸複数名詞句が無冠詞の形で現れる。そこで、これらの特徴を見てみよう。

(11)	不定(a)	the	種(定)	不定存在解釈
固有名詞	—	—	—	—
物質名詞	—	+	+(ϕ)	+(ϕ)
裸複数名詞	—	+	+(ϕ)	+(ϕ)

(11)は物質名詞と(dogsのような)裸複数名詞の類似性を示す。どちらも不定冠詞 **a** は排除されるが、物質名詞と複数名詞は **the** と共起する (**the gold, the dogs** のように)。ここで **the** は状況に存在する最大限の定要素を指示する。また、両者とも種の解釈と不定解釈がある (ϕ は無冠詞)。特に、種の解釈と不定存在解釈という根本的に異なる解釈をもつ裸名詞句の分析が問題になる (**Cats are cute. vs. Cats are playing.** のような例)。

文中の項として名辞が指示的に機能するには2つの方法がある。一つは、限定詞句＝一般量化子になる場合と、他方は固有名詞のように独自の力で個体を指示する方法である。

- (12) 指示表現 → (i) 一般量化子 <<e,t>,t>
(ii) 個体 <e>

固有名詞は直接に個体を指示するので、DPではなく、[NP John]のようにDをもたないNP投射であると考えられることは可能である。同様に、gold, applesのような物質名詞、裸複数名詞もDPでなく、NPであると分析することも可能である。実際、NPが単独で項の位置に出現可能かどうか、という点から、名詞句の言語間の差異を分析する道具立てがChierchia (1998)の「名辞写像パラメータ」である。キェルキアによれば、名詞句NPは「限定詞なしで項になるかどうか(±argument)」, 「名詞が限定詞の項として述語的に機能するか(±pred(icate))」という2つの素性をもっており、言語によって、次の3つの値の組み合わせが可能である。

(13) 名辞写像パラメータ(nominal mapping parameter)

- a. [+arg,-pred]言語。NP 単独で項になる。「犬」などの普通名詞は個体としての種(kind)を指示。(日本語, 中国語タイプ)
- b. [-arg,+pred]言語。名詞句は単独では項になれず、限定詞の述語(項)になる。従って冠詞が必要。(ロマンス語)
- c. [+arg,+pred]言語。玉虫色。[+pred]の場合には限定詞を伴って初めて項になるが、物質名詞や裸複数名詞は[+arg]の特性をもち、冠詞なしで項になる。(英語, ドイツ語などのゲルマン系言語)

キェルキアによれば、(11)の固有名詞(Johnのような例)は個体を指し、物質名詞と裸複数名詞は種(kind)を指す。これらは個体タイプであり、かつ [+arg]素性をもち、無冠詞で項になる。キェルキアによれば、中国語の名詞や日本語の「子供」などの名詞は、furnitureと同様に単数・複数を合体した物質名詞であり、種を指示するので、無冠詞で項になる。日本語の名詞は、物質名詞と同様に個体を数え上げる単数原子を独自に取り出せないで、複数形をもたず、数量表現で助数詞が必要になる。

5 英語とドイツ語の相違 — 一定性効果 —

確かに(13)によって、ロマンス系言語は適格に説明できる。ロマンス語のNPのタイプは[-arg,+pred]なので、英語と違って(11)の物質名詞や複数名詞句の環

境でも冠詞が必要である。総称文では定冠詞が現れ(=7c), 不定解釈では部分冠詞が現れる。

(14) Dei cani stanno giocando.

(「犬が何匹か遊んでいる」不定存在解釈：イタリア語の部分冠詞の例)

だが、この分析にも問題はある。日本語の名詞の素性が [+arg],[pred] とすると、NP は限定詞の補部にはなれないので、量化表現とは相容れない。しかし既に見たように、日本語でも量化表現では限定詞句が投射する。キェルキアはそこでタイプ変換を用いて名詞句の種の意味 e を述語 <e,t> に変換する語彙規則を提案しているが、これは、その場限りの解決と言わざるをえない。また「二三の」といった曖昧な数詞は普通名詞的な名詞とは共起するが、物質名詞的な名詞とは共起しない(「二三の家具」 vs. *「二三の水」)。従って日本語・中国語でも意味的には可算・不可算(物質) の区別がある(Cheng & Sybesma 1999)。

また、[arg], [pred]素性による分類では、(7)の英語とドイツ語のような同系言語の差異が説明できない。二つの素性値の違いは、意味論的には結局、(12)の指示表現の相違(個体か一般量化子か)に帰着する。従って、(13)が名詞統語論と意味論の関係を制御するパラメータと言えるのかどうか疑問が残る。

そこで最後に、(13)とは異なる角度から、即ち、冠詞の側の観点から、ドイツ語の冠詞が(11)の表現に対してどこまで共起可能か、冠詞がどの程度強力かを検討し、英語と比較する。

(15) 英語にないドイツ語の冠詞の用法

- a. 定冠詞+固有名詞：der Hans, die Maria (会話に多い。親しみを込めたニュアンス、あるいは侮蔑のニュアンスがあるといわれる)
- b. 総称解釈の定冠詞：定冠詞+複数・物質名詞
(Das) Gold steigt im Preis. (金の価格が上がっている)
- c. 定冠詞の代名詞用法：der (男性) die (女性) das (中性)

ドイツ語の特徴を(11)と同様に表わすと以下のようなになる。

(16)	不定	定冠詞	種	不定存在解釈
固有名詞	—	(+)	—	—
物質名詞	—	+	+(定)	+(φ)
裸複数名詞	—	+	+(定)	+(φ)

ドイツ語の定冠詞は、英語と異なり、これら三種類の名詞を(不定のコンテクスト以外で)全てマークできる。種を表わす用法でも定冠詞が物質名詞と複数

名詞に随意的に現れることで、不定の解釈と区別される。ドイツ語には部分冠詞はなく、不定解釈では裸名詞が生じるが、ドイツ語は定冠詞の出現範囲が広く、ドイツ語はロマンス語と英語の中間に位置すると言える。これはいったい何を意味するのか？一つは、固有名詞の意味や物質名詞・複数名詞の意味が、ドイツ語では個体・種から述語にタイプ変換していると考えられることである。英語でもthe John who I know wellのような場合、固有名詞が普通名詞＝述語タイプ <e,t>に変換する。固有名詞と種の場合には、その外延は唯一的なものであり、単一集合(singleton)と同じである。つまり、意味論的には個体 j と単一集合 $\{j\}$ は等価とみなせる (Schwarzschild 1996 によれば、クワインの主張によるもので、"Quine's Innovation" と呼ばれる)。これを使えば、固有名詞や物質名詞は以下のように定冠詞と結びつく。

- (17) a. Peter \Rightarrow PETER \Rightarrow {PETER} (単一集合 <e,t>タイプ)
 b. der Peter \Rightarrow $\lambda x [x \in \{PETER\}]$ (x が PETER である唯一の x)

あるいは、第二の方法として、タイプ変換を仮定せず (単一集合として捉えるのではなく)、次のように定冠詞は直接的に一義的な個体から一義的な個体を指示値として出す関数と分析することもできる。(Krifka 1995)

- (18) a. der (die, das): $\lambda x[x]$ (e から e への関数)
 b. der Peter \rightarrow $\lambda x[x](PETER) \rightarrow$ PETER

これは意味的には同一性関数 $\lambda x[x]$ (個体 e から e への関数) と解釈できる。つまり、Peter も der Peter も指示的な意味それ自体は変わらないが、「唯一無二のペーター」という一義性が強調され、定性効果は高まると言える。これによって、親密度が増す、あるいは、定冠詞の指示性 (ダイクシス) に焦点が置かれれば、「あの(問題のある)ペーター」のように侮蔑の語用論的效果が生じる。いずれにせよ、ここで定冠詞は、ある状況の中に定位された対象物の特定化に関わる定性(definiteness)と関係しており、定性の概念が定冠詞と、固有名詞・物質名詞・複数名詞との間で共有されていると考えられる。つまり、定冠詞は厳密な意味で意味を変化させる関数一項の関係をもつのではなく、名詞の定性をチェックするのである。これを統語的關係として見ると次のように、名詞と冠詞の間での定性の共有としてとらえることができる。

- (19) [DP der_[def] [NP Hans_[def]]] (def: 定性の素性)

英語では、指示が自明の固有名詞には定冠詞をつけないというように、冠詞と名詞は相補的で排他的関係になっている。機能的には経済的だが、無冠詞の

裸名詞句が幾つか現れる結果になった。従って、物質名詞や裸複数名詞の解釈で曖昧性が残ってしまう。また、冠詞の影響力は薄れる。他方、ドイツ語の冠詞は名詞句と排他的でなく、定性の性質（さらに NP の人称素性）を共有することによって、限定詞句の出現範囲を保持する。フランス語などのロマンス語系言語に至っては、常に D 範疇としての限定詞・冠詞を語彙的に具現することによって、個体指示、不定指示、種の指示が明示されるシステムになっている。

本稿では、日本語の問題を論じる余裕はないが、名詞の特性だけでなく、「は」「が」を冠詞相当と見る冠詞(DP)論的考察も必要であろう。対象指示・個別化・特定化という重要な機能は文法に多層的に組み込まれているに違いない。

【参考文献】

- Abney, S. (1987). *The English noun phrase in its sentential aspect*. Doctoral dissertation, MIT.
- Barwise, J. & R. Cooper (1981). Generalized Quantifiers and Natural Language. *Linguistics and Philosophy* 4, 159-219.
- Cheng, L.L-S. & R. Sybesma (1999). Bare and Not-So-Bare Nouns and the Structure of NP. *Linguistic Inquiry* 30, 509-542.
- Chierchia, G. (1998). Reference to Kinds across Languages. *Natural Language Semantics* 6, 339-405.
- Carlson, G. & F. Pelletier (eds.) (1995). *The Generic Book*. Univ. of Chicago Press.
- Fukui, N. (1986). *A Theory of Category Projection and its Applications*, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, MA.
- Krifka, M. (1995). Common Nouns: A Contrastive Analysis of Chinese and English. Gregory N. Carlson and Francis Jeffrey Pelletier, eds., *The Generic Book*, Chicago: The Univ. of Chicago Press, 398-411.
- Montague, R. (1974). *Formal Philosophy*. Yale Univ. Press.
- ピーターセン, M. (1988). 『日本人の英語』岩波新書.
- Schwarzschild, R. (1996). PLURALITIES. Kluwer.